平成○年（○）第○号 ○○被疑事件

被疑者 ○ ○ ○ ○

準 抗 告 申 立 書

平成○年○月○日

○○地方裁判所 御中

弁護士 ○ ○ ○ ○

上記被疑者に対する頭書被疑事件について、平成○年○月○日、○○地方裁判所
裁判官がなした刑訴法81条による接見等禁止決定につき、準抗告を申し立てる。

記

第1 申立の趣旨

- 1 原裁判を取り消し、検察官の被疑者に対する接見等禁止請求を却下する
との裁判を求め、予備的に、
- 2 原裁判を取り消し、後記の者に対する部分についての接見禁止決定を取り消
す
旨の決定を求める。

第2 申立の理由

- 1 はじめに
 - (1) 被疑者は、被疑者ほか2名による○○の被疑事実で、平成○年○月○日逮
捕され、同○月○日勾留決定を受けるとともに本件の原裁判により「被疑者
が罪証を隠滅すると疑うに足りる相当な理由がある」（原裁判）として接見
等禁止決定を受けたものである。

- (2) しかしながら、後述するように、被疑者には罪証を隠滅する具体的危険性は全くなく、接見等禁止を付さなければならない相当の理由がないのであって、原裁判は取り消されなければならない。
- (3) 仮に、被疑者に接見等禁止を付すとしても、事件に全く関与しておらず罪証隠滅に荷担する可能性がなく、接見の必要性がある後記の被疑者の母親との間でまで、一律に禁止する必要性、許容性は全くない。少なくともかかる者との間の接見等を禁止した部分は取り消されるべきである。

2 罪証を隠滅すると疑うに足りる相当な理由の不存在

(1) はじめに

「罪証を隠滅すると疑うに足りる相当な理由がある」（刑事訴訟法 81 条）とは、「被疑者が拘禁されていても、なお罪証を隠滅すると疑うに足りる相当強度の具体的事由が存する場合でなければならない」（京都地裁昭和 43 年 6 月 14 日決定・判例時報 527 号 90 頁等）と解されるどころ、本件においてかかる事由は認められない。

(2) 一般人を通じた罪証隠滅の可能性はないこと

そもそも、一般人との文書の授受はすべて検閲され、一般人の接見が実現したとしても、その接見は警察署職員などの立ち会いの下に、会話の内容も極めて限定されているのであるから、通信手段を通じて、あるいは一般人を介して、罪証の隠滅をはかろうとしても、実際には不可能である。

(3) 共犯者による罪証隠滅の可能性はないこと

また、被疑者との共犯関係が疑われている A らは、被疑者同様身体の拘束を受けており、同人らが被疑者と面会することは不可能である。

したがって、A らが被疑者と面会することにより、被疑者が同人に偽証等の働きかけをすることも不可能である。

(4) 共犯者間の口裏合わせ等も不可能であること

本件において、今現在、前述のとおり被疑者ほか3名全員について勾留されており、かつ、被疑者ほか3名とは別の警察署等に勾留されている。

このため、被疑者と共犯者間で直接に通謀するなどは不可能である。

少なくとも、共犯者間を通謀による罪証隠滅に対しては、共犯者間での接見等禁止を付せば足りる。

(5) 主観的可能性もないこと

前述のとおり、被疑者は、逮捕当初より、本件に関して事実をありのまま供述し、取調べにも協力的な態度を見せている。

したがって、被疑者に自己の罪を逃れようなどとして罪証隠滅をする意図など全くないことは明らかであり、罪証隠滅の主観的可能性もない。

(6) 結語

以上からすれば、被疑者については、現在勾留を受けていることで、客観的にも、主観的にも、罪証を隠滅すると疑うに足りる相当強度の具体的事由などは全く見あたらず、「罪証を隠滅すると疑うに足りる相当な理由」（刑事訴訟法81条）は認められない。

3 被疑者の母親との接見の必要性

(1) はじめに

裁判例（大阪地判昭和34年2月17日）によれば、接見禁止は「被疑者を勾留していてもなお逃亡し又は罪証を隠滅すると疑うに足りる相当な理由がある場合に、同法第80条の例外的措置としてなされるものであり、……被疑者に対する重大な心理的苦痛をもたらすものである点に鑑み、極めて慎重に、最小限度の運用にとどめるべき」とされていることに照らしても、身体拘束期間中、事件と関係が無い家族と接見することは被疑者の最低限の権利として許容されなければならない。

それさえ認めないのは勾留の目的以上の苦痛を被疑者に与えるものであって、あまりに過酷で、未決勾留の趣旨を逸脱するというべきである。

(2) 本件では、以下のような特別な接見の必要性が存する。

ア 被疑者の母親の心労

被疑者は母親にとって唯一の子どもであり、現在までの〇年にわたり同居しており、ほぼ毎日一緒に暮らしてきたところ、突然被疑者が逮捕されるに至り、大変なショックを受けている。同じく同居している被疑者の祖母には、被疑者が逮捕された事実は伝えておらず、祖母への説明についても不安を抱えながら過ごしている（添付書類1）。また、以下で述べるように、被疑者には〇の持病があり、常時使用している医療器具のない警察施設で、生活できているか、大変心配している（添付書類1、2）。

このように、事件と関係のない第三者である被疑者の母親に対して、心労をかけさせてまで接見禁止をすることは許されるべきではない。

イ 被疑者の病気

被疑者は、〇〇の持病を抱えている。被疑者は、通常、医療器具をつけて生活しているが、現在勾留されている〇〇警察署では、このような医療器具の使用が認められていない。そのため、生命に関わる重大な事故が生じる可能性がある。

このような状況において、被疑者は、母親に〇〇の治療について相談したいことがあるのみならず、家族による精神的な支えを求めており、いずれも接見禁止によって排除されることは到底許されるべきものではない。

ウ 罪証隠滅行為の不可能性

被疑者の母親は、本件事件には一切関係しておらず、被疑者と面会したときにも決して罪証隠滅行為などしないことを誓っている（添付書類1、4）。そもそも、母親との面会の際には警察官が立ち会うことになっているのだから、客観的にも、母親を通じて罪証隠滅をはかることは不可能である。

したがって、この点からも接見禁止とする理由はない。

エ 防御権行使の環境保全

身体拘束をされている被疑者には、十分な防御活動ができる環境が保障されなければならないが、接見禁止によって、弁護士が接する際に弁護士自身が家族・親族との連絡等日常生活上の連絡もしなければならない事態となり、弁護人に極めて過重な負担が加わる。

したがって、接見禁止に付すのは相当ではない。

4 結論

以上から、本件において、原裁判は取り消された上、検察官の被疑者に対する接見等禁止請求を却下されなければならない。

仮に接見禁止が付されるとしても、少なくとも下記の者については、接見禁止を付した原裁判は不当であるから、原裁判を取り消し、下記の者を除いて接見禁止を付さなければならない。

氏 名 ○ ○ ○ ○ (生年月日：昭和○年○月○日)
住 所 ○○○○
関 係 被疑者の母親

以上

添付書類

1. 陳述書 (○○○○作成)	1 通
2. 陳述書 (○○○○作成)	1 通
3. 身分証明書	1 通
4. 誓約書 (○○○○作成)	1 通